

# 封建制から資本主義への移行

ポール・M・スウィージー

モーリス・ドップ

この寄書は、*Science & Society*, Vol. XIV, No. 2, 1950 に掲載のものを、同誌および両著者の許可を得て、ここに轉載した。ポール・M・スウィージー氏はこの問題について、特にわが國の研究者の参加を編集部に希望しておられるので、次號において、高橋幸八郎氏の寄書を豫定している。 —編集部—

## モーリス・ドップ氏への批判

ポール・M・スウィージー

我々は資本主義から社會主義への移行の時期に生きている。そしてこの事實が、以前に行われた一社會體制から他の社會體制への移行の研究にたいして、特別の興味を與えている。これはモーリス・ドップの『資本主義の發展に関する諸研究』が何故かくも時宜をえたそして重要な書物であるかの理由の一つである。全巻のほぼ三分の一が、封建制の衰退と資本主義の勃興とに、捧げられている。この小論においては、私は、専らドップの勞作のこの方面だけに、注意を限ることとする。

### I ドップの封建制の規定

ドップは封建制を、「我々が通常、農奴制によって意味するものと事實上同一なもの、すなわち、生産者にたいして、強制的に彼自身の意志如何にかかわりなく課せられた、君主のある一定の經濟的諸要求を、この要求が遂行さるべき勞役の形態をとるか、それとも貨幣または現物で支拂われるべき貢租の形態をとるかにかかわりなく、充す義務」と規定している (p. 35.)。ドップはこの規定を守って、「封建制」と「農奴制」という二つの用語を、彼の書物中のどこにおいても、實際に交互にとりかえうもののように、使用している。

この規定は、生産の組織 (*system of production*) の

同一性を檢證していない點に、缺陷があるように思われる。若干の農奴制は、封建的でないことの明白な諸組織の中にも、實存することができる。また農奴制は、支配的な生産關係としてでさえ、種々異った時代に、種々異った地域において、種々異った形態の經濟機構と結びついて存在していた。だからエンゲルスはマルクスにあてた彼の最後の手紙の一つの中で、「農奴制および奴役制が特殊的に (*spezifisch*) 中世的一封建的形態でないことは確かである。我々は、征服者が土地を自己のために原住民に耕作させている所なら、どこにでも、あるいは殆んどどこにでも、それを見出す<sup>2)</sup>」と書いたのであった。したがって、ドップの規定しているような封建制の概念は、あまりにも一般的であって、特定の時代における特定の地域の研究にたいしては、ただちに適用することができない、ということになると私は考える。あるいはこれを言いかえれば、ドップが現實に規定しているのは、ある一つの社會體制ではなくて、そのすべてが農奴制を基礎にしているところの諸社會體制の一群である。特殊な歴史的問題を研究する場合には、單に封建制を取扱っているということだけでなく、その一群の中のどれが意味されているのかということをも、知ることが大切であ

2) Marx-Engels, Selected Correspondence, p. 411 f. [改造社版, マルクス・エンゲルス全集, 第20巻 579頁]

1) (New York: International Publishers, 1946)

る。

ドップの主な關心は、勿論、西ヨーロッパ封建制にある。何故なら、資本主義が生まれそして成熟するに至ったのは、外ならぬこの地域においてであったからである。したがって當然彼は、何を彼が西ヨーロッパ封建制の主要な特徴とみなしているかを、大いに明瞭に指し示し、次ぎに、これらの主要特徴をもった体制の法則と傾向の理論的分析を行うべきであったように思われる。後で私は、彼がこの道筋にしたがわなかったために、多くの疑わしい一般化に導かれたことを証明すべく試みるであろう。さらにまた、ドップが、西ヨーロッパにたいしてあてはまるどころの、そしてただ西ヨーロッパの経験によつてのみ本當にテストされるところの、議論にたいして、きわめて多種多様な地域および時代から、事實による支持を求めるということを、屢々おこなっているのは、やはりこの同じ理由によるのだと私は考えている。

これは勿論、ドップが西ヨーロッパの封建制に十分精通していない、と言うのではない。ある個所において (p.36 以下)、彼はその最も重要な諸特徴の簡潔なアウトラインを與えている。(1)「技術の低水準、したがって生産用具は單純であり、概して安價である。そして生産行爲は、多くは、性格上、個人的である。分業は……きわめて幼稚な發展水準にある。」(2)「生産は家族もしくは村落共同體の直接的必要のためのものであって、ヨリ廣汎な市場のためのものではない。」(3)「直營地農業 (demesne-farming)。すなわち、屢々かなりの規模において、強制勞役によつて營まれる、領主の所領の農業。」(4)「政治的地方分權」(5)「何らかの種類の勞役—土地保有 (service-tenure) による、領主の條件付きの土地保有」(6)「隷屬民にたいする裁判權または準裁判權の領主による所有」。ドップはこういう特徴をもった体制を、封建制の「古典的」形態といっているが、もしこれが西ヨーロッパ的形態と呼ばれていたならば、誤解に導くことがヨリ少なかったであろう。ドップは「封建的生產様式はこの古典的形態に限られなかった」ということを理由にして、この形態の構造や傾向をもっと精密に分析しなかつたようにみえる。けれども、私の考えるところでは、もし我々が西ヨーロッパにおける封建制の没落の原因を發見しようとする試みにおいて、混亂をさけようとするならば、このような分析は不可缺である。

## II 西ヨーロッパ封建制の理論

ドップの規定にしたがえば、我々は、西ヨーロッパ封建制を、農奴制が支配的生產關係であつて、生産が領主

のマネー領の内部または周邊に組織されている經濟體制、と規定することができる。この規定が、「自然經濟」、つまり貨幣取引または貨幣計算の缺如、を意味していない點に注目することが大切である。それはたゞ、市場が大部分は地方的であつて、遠隔地貿易は必ずしも全然ないわけではないが、生産の目的や方法にとつて何ら決定的な役割を演じない、ということの意味しているにとゞまる。この意味では封建制の決定的な特徴は、それが使用のための生産の組織である、という點にある。共同體の必要は知られており、生産はこの必要をみたすことを目的として、計畫され組織される。ここからきわめて重大な結果が生ずる。マルクスが『資本論』の中で述べたように、「ある經濟的社會構造において生産物の交換價值ではなく使用價值が重きをなす場合には、餘剩勞働は廣狹の差こそあれ諸欲望の或る範圍によつて制限されているのであつて、餘剩勞働にたいする無制限な欲望は生産そのものの性格からは發生しない、ということは明かである。」<sup>3)</sup> 換言すれば、資本主義の下に現存するような生産方法の不斷の改善のための壓力は、この場合には全然存在しない。技術および組織の形態は、既定の慣例に定着している。史的唯物論が教えているように、このような場合には、社會の全生活が習慣と傳統とに方向づけられる傾向がきわめて強い。

けれども、こういう體制は必然的に安定的または靜止的であると推斷してはならない。不安定性の一要素は、勢力と威信の基礎となるところの土地および家臣を求めての、領主相互間の競争である。この競争は資本主義の下における利潤のための競争に類似しているが、その作用は全く異っている。それは多かれ少なかれ不斷の戰爭状態をひきおこす。しかしその結果としての生命と財産の不安定性は、資本主義的競争のように生産方法を革新するどころではなくて、専ら領主と家臣との相互依存を強めて、封建的諸關係の基礎構造を補強するにすぎない。封建的戰爭は、社會を顛覆し、貧困化し、そして疲弊させるが、それは社會を變形する傾向を全くもたない。

不安定性の第二の要素は人口の増大に見出されるべきである。マネーの構造は、それが雇傭することのできる生産者の數およびそれが扶養することのできる消費者の數にたいして限界をおくようにできている。同時に、この體制の先天的保守性が一さいの膨脹を抑止している。勿論これは、いかなる發達も可能でない、というのでは

3) Capital, I, p. 260 イタリックは添加した。(Capital の引用はすべて Kerr edition である。) [長谷部文雄譯『資本論』第2分冊 184頁——なおアドラッキー版にははじめからイタリックがある——譯者註]



なくて、ただ、この發達が人口の増加におくれる傾きがある、というだけである。農奴の年下の息子達は封建社會の正規の枠の外におしだされて、中世の著しい特徴たる例の浮浪人口——施し物かまたは盜掠によって生活し、傭兵の素材を供給する——を形成するようになる。しかし、こういう餘剰人口は、不安定性と不安全性を助長するとはいへ、封建社會にたいしては何ら創造的または革命的な影響を及さない<sup>4)</sup>。

したがって我々は、西ヨーロッパ封建制が、その慢性的な不安定性と不安全性にもかかわらず、所與の生産方法と生産関係を維持するに好都合な、きわめて強い偏重をもった體制であった、と推斷してもよいであろう。私は、マルクスがイギリスの統治時代以前のインドについていつたことを、我々が西ヨーロッパ封建制について、いっても差支えないと思う。すなわち、「あらゆる内亂、侵入、革命、征服、飢饉……も、その表面より深くには達しなかった」と<sup>5)</sup>。

もしドップが、西ヨーロッパ封建制のこの先天的に保守的なそして變化に抵抗する性格を十分に考慮していたなら、彼は、中世後期におけるその分解と衰退を説明するために提出する理論を變更せざるをえなかつたであろう、と私は信じている。

### III 封建制の衰退に関するドップの理論

ドップは、一般に容認されている封建制の衰退の説明を、次のように要約している：—

往々にして我々は、商業の衝撃によって分解させられた多かれ少なかれ安定的な經濟の描寫を呈示される。この商業は外的力として作用し究極において自らが壓服し去る體制の外部で發展するのである。我々は、古い秩序から新しい秩序への移行の支配的因果関係をマネー經濟と外的世界との間の交換の領域に見出す解釋を與えられる。「自然經濟」と「交換經濟」は混合することのできない二つの經濟秩序であって、後者の出現は前者の解體をひきおこすに十分であるといわれている。(p. 38)

ドップはこの過程の「著しい重要性」を否定してはいな

4) 12世紀および13世紀の活潑な植民運動および教化運動が、この議論の反證になると考えられるかもしれない。しかし私はそうではないと思う。植民運動は商業および商品生産の發達の反映であって、封建社會の内的膨脹力の發現ではなかったように思われる。Henri Pirenne, *Economic and Social History of Medieval Europe* (New York, 1937), ch. 3. Sec. II を見よ。

5) Emile Burns, ed., *A Handbook of Marxism* (London, 1935), p. 182.

い。「それが中世末のきわめて著しい變化と関係していたことは全く明瞭である」(p. 38)と。しかし彼は、この説明は封建制にたいする商業の作用を十分深く吟味していないから不適當だと考えている。もし問題をもっと精密に検討するならば、我々は「實際に、貨幣經濟の發達そのものが農奴制の強化に導いたという證據は、それが封建制の衰退の原因になったという證據に劣らず澤山あるように思われる」ことを知るであろう、と彼は論じている(p. 40)。彼はこの主張を擁護するために、かなり多くの史料を挙げており、その「著しい例」は「十五世紀末の東ヨーロッパにおける封建制の再發——フリードリッヒ・エンゲルスが、市場のための生産の發達と結びついた古い體制の復活、と述べた、かの『第二農奴制』——である。」(p. 39) ドップは、こういう史料に基いて、もし西ヨーロッパで作用していた要因が商業の勃興だけであつたとすれば、その結果は、封建制の分解であつたかもしれないが、またその強化であつたかもしれない、と推論している。そこで當然、現實に見られるような結果をもたらすためには、他の諸要因が作用していたに相違ない、ということになる。

これらの諸要因は何であつたのか？ ドップはそれを封建經濟自體の内部に見出すことができると信じている。彼は「その證據が必ずしも豊富でもなければ、また決定的なものでもない」ことを認めているが、なお次のように考えている。「生産組織としての封建制の不能率性こそは、これを支配階級の收入にたいする必要の増大と結びつけて考える時、この衰退にたいしてまず第一に責をおうべきものであつた。このことは我々の手にしうるかぎりの證據が強く指し示している。何故なら、この追加的収入の必要は、生産者にたいする壓迫を増大させて、この壓迫が文字通り堪えがたいものとなる點にまで、おしすすめたからである」(p. 42)と。この益々増大する壓迫は、「遂にはこの體制がよって以て養われていた労働力を潤渇させるかまたは實際に消滅させる」こととなつた」(p. 43)

換言すれば、ドップの理論にしたがえば、封建制の崩潰の本質的原因は労働力の過度搾取であつた。つまり、農奴が一せいに領主の所領を捨てさり、しかも殘留した者はあまりにも少数でまたあまりにも過勞になっていたため、體制は自己を古い基礎の上に維持することができなくなった、というのである。商業の勃興ではなくして、實はこの發展こそは、封建的支配階級が、究極においては地方における生産諸關係の變形をきたすような諸方策——勞役の金納地代化(commutation)・直營地の小作農(tenant farmer)への貸與、等々——をとることを

餘儀なくさせたのであった。

#### IV ドップの理論の批判

ドップは、彼の理論を確立するためには、封建的支配階級の収入にたいする必要の増大および農奴の土地からの逃亡がいずれも、封建体制の内部に作用する諸力によって説明できることを、示さなければならない。彼がこのことをどのように説明しようとしているかを見ることにしよう。

第一に、領主の収入にたいする必要に関して。ここでドップは、彼が封建的体制に固有なものとみなしている、多数の要因をあげている。農奴は踐められており、まず第一に所得の源泉とみなされていた。(p. 43 f.) 寄生的階級の大きさは、領主の家族の自然増加、二次的下封(sub-infeudation)、および家臣の増加——これらはすべて、「農奴人口の餘剰労働によって扶養されねばならなかった」——の結果として、膨脹する傾きがあった。戦争と盗掠は「封建家族の経費を増大させ」そして「土地の濫費と荒廢を廣めた」。最後に、「騎士制度の時代が進むにつれて、貴族家族の奢侈もまたその法外な饗宴と高價な催し物を携えて進み、彼らの壯麗崇拜を競つて張合った。」(p. 45)

以上の諸要因の中の二つ——農奴の利益の無視および戦争と盗掠——は全時代を通じて存在したのであるから、もしそれが時の経過につれて益々強くなったのだとすれば、このことは説明を必要とする。つまりそれを單純に封建制の自然的特徴とみなすことはできない。しかしドップは全然こういう傾向を説明しようとはしていない。また、彼が封建的發展の決定的な時期における十字軍に基くものとしている特殊な濫費でさえ、その意義は疑わしい。結局のところ、十字軍は東洋で戦ったのであり、當然彼らは大がいは、土地を離れて暮していた。十字軍はある程度までは掠奪の方便であって、彼らの後援者や参加者に物質的報酬をもたらしたのであった。また、十字軍は當時の「常時的な」封建的戦争にたいする追加物というよりもむしろその代用物であった。概してこの二つの要因はドップの理論にとつて殆んど助けにはならないように思われる。

しかし他の二つの要因、すなわち、寄生的階級の増大と貴族家族の奢侈の増大については若干事情が異っている。この場合には、我々は収入増加の必要の證據らしいものを有する。しかし我々がドップの理論にとって必要な支持をも有するかどうか、は一層疑わしい。寄生的階級の大きさの増大は、農奴の人口の増大と釣合つていた。更にまた、中世を通じて、利用可能な未耕地は豊富に在

った。したがって封建制は、その極度に保守的な本性にもかかわらず、緩慢にはあるが着實に、膨脹した。戦争の負擔は主として上層階級にかかった(というのは彼らだけが兵役に服することを許されていたのだから)という事實を考慮にいれると、我々は、寄生的階級の大きさの重大な相対的増大があったかどうか、疑ってもよいであろう。あれかこれかについて何も明白な事實的證據がない場合には、この要因に決定的な重みをもたせることが許されないことは確かである。

他方において、封建的支配階級の奢侈の増大が事實であったことを、疑う理由はない。この點に關する證據は豊富であり、しかもそれらはすべて同一の方向をさしている。しかし、この奢侈の増大は、封建体制の本性によって説明することのできる傾向であったのか、それともそれは何か封建体制の外部に生起しつつあったものを反映しているのか? 總體的にみて、後者が事實であったと考えるのが正しいようである。資本主義のような動態的な体制の下においてさえ、消費者の嗜好の自發的變化は、とるにたらない重要性をもつにすぎない<sup>6)</sup>。したがって我々は、封建制のような傳統に縛られた社會においては、尙更、このことは眞實であると考えてしかるべきである。さらにまた、我々が一たび封建体制の外部をみるならば、封建的支配階級の奢侈の増大の十分な理由を見出す。すなわち、11世紀以降の商業の急速な發達は、手に入れることのできる財貨の量および種類を不斷に増加させた。ドップは商業と封建的支配階級の欲求との間にこういう關係があることを認めているけれども、彼はそれを全くあまりにも軽く見のがしているように思われる。もし彼が、それにたいして、それ相應の重みを與えていたならば、支配階級の奢侈の増大が封建体制にとって内的な諸原因に基いていた、と主張することはおそらくできなかったであろう。

さて、今度は農奴の土地からの逃亡についてみることにしよう。これが十四世紀を特徴づける封建經濟の危機の重要な一原因であったことには、殆んど疑問の餘地がない。ドップは、それが領主の壓迫に基因していた(そしてこの壓迫が今度はまた彼らの収入にたいする必要の増大に起源していた)と考えており、したがって、それ

6) だからして、例えばシュムペーターは、資本主義の下においては「嗜好の變化における消費者のイニシアティブは……些細であり、消費者の嗜好の變化はすべて生産者の活動に附隨しており、それによってひきおこされる」と假定しても差支えない、と考えている。Business Cycles, (New York, 1939), I, p. 73. いうまでもなくこの假定は、消費にたいする生産の優位についてのマルクスの理論と、完全に一致する。



を封建體制にとって内的な過程として説明することができる、と思っている。しかし彼はこの假定にたいして得心のゆくような例をあたえただろうか？<sup>7)</sup>

私はそう思わない。農奴は、彼らの主人がいかにも無理取りをするようになったとしても、どこか行くべきところをもたない限りは、單純にマナーを捨て去ることはできなかった。成程、私が前に論じたように、封建社會は餘剰な浮浪人口を生み出す傾きがある。しかし、社會の層を構成するこの浮浪人口はマナーに席をもたない者達からなっているのである。だから、多少とも著しい數の農奴が、自發的に自己の保有地を拋棄して、社會的階梯の最下段に身をおとすであろう、と想像することは殆んど現實的ではない。

しかし、農奴の逃亡は都市の發達と時を同うして、特に 12 および 13 世紀に、おこったということを想起するならば、全問題が全く新しい局面——驚くべきことには、ドップはこの局面にたいして殆んど注意を拂っていない——を呈示する。急速に發展しつつある——現に自由と雇傭と改善された地位とを提供しつつある——都市が、虐げられた農村の住民にたいして、強力な磁石のような作用をしたことは、殆んど疑いをいれない。そして市民 (burghers) 自身は、追加的勞働力と彼らの軍事力を高めるためのヨリ多くの兵士とを必要としており、農奴が彼らの主人の裁判權から免れるのを助けるために、あらゆる努力を行った。「往々にして」とマルクスはエンゲルスへの手紙の中で述べた、「12 世紀に市民が農民を都市へ脱出させた仕方には、何かきわめて悲愴なものがある」と<sup>8)</sup>。こういうことを背景にすれば、さもなければ理解できないかもしれない、土地からの移動が、實は都市の勃興の必然的結果であることがわかる。ドップの書いている壓迫が、農奴に豫め逃亡の氣をおこさせる重要な一要因であったことは疑いないが、それが、ただそれだけで作用していたのなら、大量の移住を生み出す

ことは殆んどできなかつたであらう<sup>9)</sup>。

封建制の崩潰に關するドップの内的原因の理論は、もし都市の勃興が封建體制にとって内的な過程であったことを證明することができるならば、なお救われるであらう。しかし、私がドップを読んだかぎりでは、彼はこのことを證明しようとはしていなかつた。彼は中世都市の起源の問題については折衷主義的な見地をとっているが、一般に都市の發達が商業の中心地としてのその重要性に比例していたことを認めている。商業の發達はいかなる意味においても封建經濟の一形態とみなすわけにはゆかないから、當然、ドップは都市生活の勃興が内的封建的諸原因の結果であると論ずることは、殆んどできないということになる。

封建制の衰退に關するドップの理論にたいする以上の批判を要約すると、彼は、西ヨーロッパ封建制の法則と傾向を分析することを怠つたために、實際にはその體制にとつて外的な諸原因から生ずるものとしてのみ説明することのできる若干の歴史的發達を、内在的傾向と見誤つている、ということになる。

## V 再び封建制の衰退の理論について

私は、封建制の衰退に關するドップの理論は、若干の點において不十分であると思うけれども、それにもかかわらず、彼はこの問題の解決のために重要な貢獻をした、と考えている。傳統的な諸理論にたいする彼の獨特な批判は、多くは正しいものであり、ドップが強調している諸要因——中でも、支配階級の奢侈の増大と農奴の土地からの逃亡——を考慮に入れることを怠るような理論は、決して正しいものとみなされえないことは明白なように思われる。故に、以下の評註と提言は、それがドップの意見と異っている場合にさえ、彼に負うところが多い。

思うにドップは、一般に受容されている理論のうちのある部分、すなわち、封建制の衰退の根本原因は商業の

7) それは一假設であつて、確立された事實ではないということが強調されるべきである。ロドニー・ヒルトン Rodney Hilton, すなわち、ドップが序文の中で、彼に負うところがあると述べている中世經濟史の一研究家は、ある論文の中で、「相當な數の農民が前述の理由 (すなわち、たえ難い壓迫の状態) のために、その保有地を捨て去つたことについての、適當な統計的證明のようなものは全然ない」と述べている。Modern Quarterly, II. (Summer, 1947), p. 268.

8) Selected Correspondence, p. 74. [改造社版マルクス・エンゲルス全集第 17 卷 536 頁]

9) 後に論ずるように、東ヨーロッパにおける都市生活の相對的缺如こそは、この地方の農民を領主の意のままにならせ、そしてまたこの地域における 15 世紀の農奴制の再發をひきおこした原因である。ドップが東ヨーロッパにおけるこの「第二農奴制」を引用して、商業は必然的に封建經濟の分解をひきおこす傾向がある、という見解に反對したことが想起されるであらう。今や、問題が實際にははるかに一層複雑であることがわかる。商業の中心地の近くでは、封建經濟にたいする作用は強力に分解的であるが、遠くはなれたところでは、その作用は丁度正反對になる傾きがある。これは重要な問題であり、後にまたこの點に立ちかえることにしよう。

發達であると主張する部分、を動揺させることに成功しなかったようである。しかし、彼は、封建制にたいする商業の衝撃が通常考えられているよりも、もっと複雑だということ、すなわち、商業は「貨幣經濟」に等しく、貨幣經濟は封建的關係の自然的溶解劑だという觀念はあまりにも單純だということ、を明かにした。我々は、封建經濟にたいする商業の關係をもっと精密に探究することにしよう<sup>10)</sup>。

この關聯における重要な争闘は「貨幣經濟」と「自然經濟」との間にあるのではなくて、市場のための生産と使用のための生産との間にあるように思われる。我々のなすべきことは、商業が市場のための生産の組織を發生させた過程を解明し、しかるのちに、この組織が以前から存在していた封建的な使用のための生産の組織にあたえる衝撃を跡づけることである。

最も原始的なもの以外は、どんな經濟でも幾らかの商業を必要とする。したがって、地方の村落市場およびヨーロッパの暗黒時代の巡回旅商人は、封建的秩序にとっての脅威というよりもむしろその支柱であった。つまりそれは、經濟諸關係の構造に影響を與えるほどの大さになることなしに、不可缺の必需品を供給したのであった。商業がはじめて十世紀に（或いは多分それよりももっと前に）擴大しはじめた時には、それは當時のきわめて高い輸送費用にたえるような比較的が高價な財貨の——純地方的な交換とは區別された——長距離の交換の領域においてであった。この商業の擴大が行商制度と呼ぶことのできるような形態に止まるかぎりには、その作用は必然的に些細なものにすぎなかった。しかしそれが行商制度の段階をこえて發達し、商業および積替の地方的中心地を確立させはじめると、質的に新しい要因が導入された。というのは、これらの中心地は、長距離交換を基礎にしていたけれども、その正當な要求として、商品生産の發

生因になることは避けられなかったからである。これらの中心地は周邊の地方から食料の供給をうけなければならなかった。そしてこの中心地の手工業はマナー經濟に知られているどんなものよりも高度な形態の専門化および分業を含んでおり、單に都市住民自身に必要な生産物を供給するに止まらないで、農村地方の住民が都市市場における販賣の収益によって購買しうる諸商品をも供給した。この過程が展開するにつれて、商業中心地の發生のもととなった長距離商人の取引は、その獨特の重要性を失い、多分大多数の場合には、都市經濟の中で二次的地位を占めるようになった。

以上によって、我々は、長距離商業がいかにして創造的な力でありえたかを知る、それは古い封建的な使用のための生産の組織の傍に交換のための生産の組織を成立させたのである<sup>11)</sup>。この二つの組織は、一たび並置されると、當然お互に作用を及ぼしはじめた。我々は交換經濟から使用經濟へ注ぎこむ影響の流れを若干検討することにしよう。

第一に、そして恐らくは最も重要なことであるが、マナー的生產機構の不能率性——それが競争相手をもたなかったうちは、多分何人もこれに気づかなかつた、あるいは少くもそれに何ら配慮しなかつた——が、今や、専門化と分業とのより合理的な組織との對照によって、明瞭に曝露された。製造業品は造るよりも買う方が安かつた。そしてこの買いへの壓迫が賣りへの壓迫を生みだした。これらの壓迫は相合して、封建所領を交換經濟の軌道の中へもたらすように、強力に作用した。「今や家内工場が何の役にたったか？」とピレンヌは尋ねている「それはかつては各々の重要なマナーにおいて、數十人の農奴に織物や農具を製造させる習わしであった。ところが、今では、それらは近隣の都市の職人によって、少しも劣らずに造られるというのに、家内工場は殆んどいたるところで十二世紀中に消滅させられた。」<sup>12)</sup>

第二に、大量の經濟的事實としての交換價値の存在そのものが、生産者の態度を變形させる傾きがある。今や可滅的な財貨の集積という不合理な形態ではなくて、貨幣または貨幣にたいする請求權というきわめて便宜なそ

10) 中世における商業の發達に関する問題は、封建制の衰退に関する問題とは、原則として別であるということが、注目されるべきである。どんな理由のためであろうと、商業の増大という事實が與えられれば、必ず封建制は若干の點において影響をうけざるをえなかつた。ここでは商業の發達の理由について論ずる餘裕はない。私はただ、ピレンヌの理論——それは 11 世紀における西方の港へのおよび港からの地中海航路の再開、と北海およびバルチック海からロシアを経て黒海にいたる商業ルートの、スカンジナビヤ人による 10 世紀以來の開発とを力説している——がきわめて有力なものだと思つているということ、を述べるに止める。しかし、商業が西ヨーロッパ封建制の衰退を招いた決定的原因だということに同意するためにピレンヌを受け入れてはならないことは明かである。

11) この點に關しては、二つの經濟形態の間の對照が決して都市と地方との對照と同一ではないということを確認することが大切である。農村における市場のための生産は、都市のそれと同様に、交換經濟に含まれる。したがって、二つの經濟形態の相對的重要度を、都市人口の農村人口にたいする割合というような、單純な指標によって測定することは、決してできない。

12) Pirenne, op. cit., p. 82.



して可動的な形態で、富を追求することが可能になる。交換経済においてはまもなく富の所有がそれ自體で目的になる、そしてこの心理的變形は、單に直接の關係者にたいしてのみでなく、交換経済と接觸する人々にたいしてもまた（勿論疑いもなくヨリ少い程度にはあるが）、影響を與える。故に商業者や商人だけでなく、古い封建社會の成員までが、今日なら、經濟事象にたいするビジネスライクな態度と呼ぶべきものを身につける。ビジネスマンは常にヨリ多くの収入を必要としているから、ここに我々は支配階級の収入にたいする必要の増大の説明の一部を有する。なお、ドップが封建制の衰退を説明するにあたって、この點に多大の力點をおいていたことはすでに見たところである。

第三は、そしてそれはまたこれと同じ聯關において重要なことであるが、封建的支配階級の嗜好の發展である。ピレンヌはこの過程を次ぎのように記述している。

商業が廣まったところではどこでも、商業は、自らもち込んだ新しい消費財にたいする欲求を創りだした。例によって貴族階級は奢侈もしくは少くとも彼らの社會的地位にふさわしい慰安にとりかこまれていることを欲した。例えば、十一世紀における騎士の生活を十二世紀におけるそれと比較すれば、この二つの時期の間に、食物、衣服、家具および就中武器のために必要とされる経費が、いかに高くなつたか、がたゞちにわかるのである<sup>13)</sup>。

ここに、中世後期における封建的支配階級の収入増加の必要を理解するための鍵になりそうなものがある。

最後に、交換経済の中心地でありまたその養育者でもあった都市の勃興は、地方の隷屬民にたいして、ヨリ自由なヨリ良い生活の展望を開いた。疑いもなくこれは、ドップが正當にも封建制の衰退の決定的な要因の一つと考へている、土地からの逃亡の主な原因であつた。

勿論、交換経済の勃興は古い秩序にたいして他の作用も及した。しかし私は、前述の四點は、既存の生産の組織の破壊を保證するにたるほど、廣汎かつ強力であつたと考へている。ヨリ高度に専門化した生産のヨリ優れた能率性、直接的使用のためではなくて市場のために生産することによってえられるヨリ大きな利得、都市生活が勤勞者にたいしてヨリ魅力的であること。これらの諸要因のために、新しい組織が一たびそれ自身の足の上に立つことができるほど強力になれば、それが勝利するのは單なる時間の問題となつた。

しかし交換経済の勝利は、必ずしも農奴制や直營地一

農業の終末を意味するわけではない。交換経済は、奴隷制、農奴制、獨立自營勞働、または賃銀勞働と兩立することができる。これらのあらゆる種類の勞働によって市場のための生産が行われた例は歴史上甚だ多い。したがって、ドップが商業の勃興は自動的に農奴制の清算を伴うという理論を拒否したのは、疑いもなく正當であり、もし農奴制が封建制と同一視されるならば、勿論このことは定義により封建制についてもあてはまる。交換経済の進行が、現實に、農奴制の衰退と手を携へて進んだという事實は、説明されねばならないことであり、單純に自明のこととみなすことはできない。

この問題を分析する際には、西ヨーロッパにおける農奴制の衰退の不均齊な性質を、黙過してもさしつかえない、と私は思う。ドップは、西ヨーロッパの若干の地域においては、暫時の間、商業の發達が農奴制の羈絆の弛緩ではなくてむしろ強化を伴つたことを指摘している。これは疑いもなく事實であり、そして重要である。また彼は多數の外見上のパラドックスを解決することに成功している。しかし、こういう一時的かつ部分的な傾向の逆轉があるからといって、全體にわたって見られる光景を曖昧にすることは許されない。この全體にわたってみられる光景というのは、獨立農民の勞働、または（はるかに小範圍ではあるが）雇傭勞働を用いる小作農業 (tenant farming) によって、農奴勞働を用いる直營地農業をたえず置きかえることであつた。眞の問題はこの基礎的な趨勢を説明することである。

作用している一團の諸原因の中で二つのものが決定的に重要なものとして際立っているように思われる。第一には西ヨーロッパ全體を通じてかなり普遍的にみられた都市の勃興であり、それが及した作用は單にマナーから逃げだした農奴に避難港を提供することだけではなかつた。それはまた後に殘留したものの地位をも變化させたのである。實際に家財をまとめて都市へ移つたのは、多分農奴總數の比較的小部分にすぎなかつたが、それでも、都市で享受されているヨリ高い標準の壓力を地方において有効に感知させるには十分であつた。勞働者が高勞賃地方へ移動する可能性をもっている場合には低勞賃地方においても勞賃が騰貴せざるをえないのと全く同様に、農奴が都市へ移動する可能性をもつた場合には、農奴にたいする讓歩が行われなければならなかつた。こういう讓歩は、必然的に、ヨリ多くの自由、封建的貢租の貨幣地代への轉形、という方向をとつた。

第二に、マナーは市場のための生産に轉向することができたし、また多くの場合實際に轉向したけれども、それはこの目的のためには基本的に不能率であり、不適當

13) Ibid., p. 81.

であった。技術は幼稚であり、分業は未発展であった。管理上の見地からすれば、マナーは扱い難くかつた。就中、生産と消費とのすっきりした分離が行われていなかったため、生産物の費用計算は殆んど不可能であった。さらに、マナーにおいてはすべてが習慣と傳統とによって規制されていた。このことは耕作方法にたいしてのみでなく、また遂行される作業の量および必要労働と餘剰労働とへのその分割についても、あてはまった。農奴は義務を負っていたが、また権利をももっていた。この習慣的な諸規則と諸規定の全體が、ことごとく、貨幣的利得のための人的および物的諸資源の合理的搾取にたいする、障害になった<sup>14)</sup>。おそかれはやかれ、新型の生産關係、新形態の機構が、變化した經濟秩序の要求にかなうことが、判明せざるをえなかった。

以上の推論は、ドップがきわめて重視している 16 世紀以降の東ヨーロッパにおける「第二農奴制」によって論破されるだろうか？ この場合には、商取引を行う機會の増大が農奴制の羈絆の劇的なしなかも永續的な強化の因になるということが、どうしておこったのか？

この問題にたいする回答は、思うに、第二農奴制の地理學の中に見出されるであろう。すなわち、この現象は新しい交換經濟の中心地から東の方へ進むにつれて、ますます著しくなり、強烈になるという事實の中に<sup>15)</sup>。都

14) ドップは往々にして封建制のこの面を看過して、ただ農奴だけが農奴制の廢止から利益をえたように思っているようである。「農民の解放は實際には地主の解放であった。地主はそれ以後は彼の土地に附屬してない自由な人々と取引しなければならなくなったが、單なる撤回可能な契約によって彼ら进行处理することができた。地主はこの契約の短期性によって、土地の地代が増加するに伴って、契約を改訂することができたのである」ということを彼は忘れる傾きがある。Pirenne, A History of Europe from the Invasions to the XVI century. (New York, 1939), p. 533.

15) ピレンヌは、次ぎのような圖解的な描寫をおこなっている。「エルベ河の西岸にいたるまでの地域では、この變化は、賦役、賦課、およびあらゆる種類の專横な諸方策の再發以外には、何ら特別の結果を惹起しなかった。しかしこの河をこえると、ブランデンブルグ、プロシヤ、シレジア、オーストリア、ボヘミヤ、およびハンガリーにおいては、この變化は最も無慈悲に利用された。13 世紀の自由な植民者の後裔達は、その土地を系統的に収奪されて、隷農 (Leibeigene) の状態に陥った。所領の大仕掛な搾取は、彼らの保有地を併呑して、彼らを隷屬的状态に陥れた。彼らの状態は奴隷の状態にきわめてよく似ていて、農奴の身體を土地とは別に賣却することが許されていたほどである。16 世紀の中頃からは、エルベ河の東岸にいたるまでの全地域およびズデーテン山地は、ユンカーによって搾取される、Rittergueter によつて

市生活がきわめて高度に發達している中心地においては、農業労働者は、土地に留まるかわりにとるべき方策をもっている。そしてこのことが彼にいわば取引上の強固な地位を與える。支配階級が貨幣的利得を目的とする市場のための生産に轉向すると、彼らは新しいより柔軟性のある、そして相對的により進歩的な搾取形態をとることが必要なことを、知るようになる。これに反して、交換經濟の周邊においては、領主と農業労働者との相對的地位は非常に異っている。労働者は行くべき所がないから逃亡することができない。彼はいっさいの實際的事柄について領主の意のままになっており、その上、領主は都市生活に接觸して教化をうけたことがない。商業の發達がこういう状態にある支配階級に利得慾を吹きこむと、その結果は新しい形態の搾取の發展ではなくて古い形態の強化となる。マルクスは次の章句の中で事態の根本を究めていた (尤も、彼は特に東ヨーロッパの第二農奴制について述べたわけではないが)、

その生産がまだ奴隷労働、賦役労働、等々という低級な形態で行われている諸民族が、資本主義的生産様式によって支配されている世界市場の渦巻の中に引き入れられるや否や、生産物の輸出のための販賣が彼らの主要關心事となり、奴隷制、農奴制、等々という野蛮な殘虐の上に、過度労働という文明化した殘虐が接木される<sup>16)</sup>。

ドップの理論は、西ヨーロッパ封建制の衰退が支配階級による社會の労働力の過度搾取に基いていた、と主張している。もしこの節の推論が正しいとすれば、西ヨーロッパ封建制の衰退は、支配階級が社會の労働力にたいする支配を維持することができず、したがってまたそれを過度搾取することができない、ということに基いていたと言う方が、一層精確であるように思われる。

## VI 西ヨーロッパにおいて封建制の後に來たものは何か？

ドップの年代記述——多分それは何人からも重大な論駁を加えられることはないであろう——にしたがえば、西ヨーロッパ封建制は 14 世紀に尖銳な危機の時代に入り、それ以後地域によって緩慢の差はあるが分解した。他方において、我々は、最も早くてさえ 16 世紀の後半にいたるまでは、資本主義的時代の開始について語ることはできない。そこで次ぎの問題が提起される。「我々は、

蔽われるようになった。白人奴隷にたいする取扱いにおいて發揮される人間性の程度に關しては、ユンカーは西印度の農園主に比肩するであろう。」(ibid, p. 534)

16) Capital, I, p. 260. [長谷部譯第 2 分冊, 185 頁]



當時（すなわち封建制の分解）と 16 世紀後半との間に介在する時期、我々の年代記述によれば、その生産様式に関する限りは封建的でも資本主義的でもなかったように思われる時期、における経済体制を何というべきなのか？」(p. 19) これは重大な問題であり、ドップがこの問題をこういうすっきりした形で提起したことにたいして我々は感謝すべきであろう。

ドップが彼自身の問題にたいして與えた回答は、逡巡的で非決斷的である。(p. 19-21) 成程、封建的生産様式は「高度の分解段階に達していた」。「商人ブルジョアジーは富と勢力とに向って成長していた」。「都市の手工業の中には、そしてまた、裕福なおよび中程度に裕福な自由保有農(well-to-do and middling, well-to-do freehold farmers) の勃興の中には、封建制にたいする獨立性をかちえた一生産様式が認められる」。「小さな小作農 (tenant) の多くは……貨幣地代を支拂つていた」。そして「領地は大がいは雇傭労働によって耕作されていた」。しかしドップはこれらの敘述の殆んどことごとくにたいして限定を加え、「地方における生産者と領主および親方との間の社會的關係は、多くの中世的性格を保持しており、少くとも封建的秩序の外皮は大部分残存していた」と述べることによって、しめくゝつている。換言すれば、ドップの回答は、結局のところこの時期は封建的であつたということになると、私は思う。

しかしこの回答は必ずしも十分なものではない。ドップの抱括的な規定の見地からであるにせよ、いやしくもこの時期が封建的とみなされるとすれば、少くともそれは地方における農奴制の繼續的優位を特徴としていたはずである。とにかく、この時期こそはまさに農奴制が全ヨーロッパにわたって衰退して相對的に小さな部分を占めるにすぎなくなった時期であつた、という見解には立派な典據がある。

イングランドでは（とマルクスは述べた）農奴制が 14 世紀の終り頃に事實上消滅した。當時においては人口の壓倒的大多數が、また 15 世紀においては尙一層多くのものが、どんな封建的稱號によって彼らの所有權が隱蔽されていたにせよ、自由自營農民から成立っていた<sup>17)</sup>。

マルクスは、この發展が大陸においてどれくらい廣く行きわたっていたかについては、制限を設けていたように思われる。しかし彼は、生涯のおわりまでには、この制限を捨てていたに相違ない。1882 年の末、すなわちマルクスの死の三ヶ月まえに、エンゲルスは、マルクスな

わち古いゲルマンの土地制度を取扱つた一論を書いた。彼は草稿をマルクスに送り、「13 世紀および 14 世紀に農奴制が殆んど全面的に消失したこと (zurücktreten) —法的または實際的に—に関する點は、私にとっては最も重要である。何故なら君は以前にこの點について、これと背馳した意見を表明したから<sup>18)</sup>」という註釋を加えた。二日後にマルクスは返事を書いた、「草稿をお返しします、大變結構です<sup>19)</sup>。そしてエンゲルスはこれにたいして答えた。「我々が農奴制の歴史について、人が商賣上のことであるように、『意見の一致を見た』ことを喜んでいる」と<sup>20)</sup>。

以上の章句は、15 世紀までに封建的諸形態の實質がなくなり、農奴制は全西ヨーロッパを通じて、支配的生産關係たることを止めていた、ということが、マルクスおよびエンゲルスによって熟考された判斷であつたことを示している。ドップがあげている證據の中には、我々がこの判斷を破棄しても差しつかえないと確信させるようなものは、何もない。

ドップは次ぎのように答えるかもしれない、彼は意見を異にしているのではない、彼は農奴制の實質的消滅を容認している、そしてこの時期は本質的に封建的だという彼の特徵づけは、農民が尙その移動を制限されており、多くの點で領主に依存していたという事實を基礎にしている、と。彼が述べていること (p. 63-66) は以上のような意味に解釋できると私は思う。そして、ドップのいわんとしたことを知るのに都合のよい地位にいる、クリストファー・ヒル Christopher Hill も、このような解釋を支持している。ヒルによれば、

ドップ氏は、封建制についての彼の規定のおかげで、15 世紀および 16 世紀におけるイングランドの農村地方がどのような状態にあつたかを、明かにすることができ、封建制を勞役と同一視してイングランドにおける農奴制の廢止に基本的な意義をもたせる見解を彼は拒否している。ドップ氏は、貨幣地代を支拂っている農民 (16 世紀のイングランドの農村地方の壓倒的大多數) が、他の數えきれないほど多くの點において、彼らの地主に依存しているかもしれない、ことを明かにしている。…… 16 世紀のイングランドにおいては、

18) Selected Correspondence, p. 408 [改造社版全集第 20 卷, 574 頁]

19) Briefwechsel, Marx-Engels-Lenin Institute ed., IV, p. 694 [同上, 第 20 卷, 578 頁] この書翰は Selected Correspondence には入っていない。

20) Selected Correspondence, p. 411 [同上, 第 20 卷 579 頁]

17) 同上, I, p. 788 [同上第 4 分冊 310 頁]

農業における資本主義的生産関係が、弘まりつつあったけれども、大部分の地方における支配的搾取関係は、尙依然として封建的であった。……重要なことは、領主と農民との間の諸関係の法的形態ではなくて、この関係の経済的内容である<sup>21)</sup>。

こういうやり方で、封建制の概念をひきのばすことは、科学的有用性にとって不可欠な明確性という性質を、この概念から奪いとることになるように思われる。もし、小作農 (tenant) が領主によって搾取されており、「数えきれないほど多くの點において」領主に依存しているという事実が、封建制の極印だとすれば、我々は、例えば合衆國の若干の地方が今日封建的だと推斷しなければならないであろう。こういう敘述はジャーナリスティックな目的のためには是認されるかもしれないけれども、もしそこから出發して、合衆國のこれらの諸地方が今日その下で生活を営んでいる経済体制は、基本的な諸點において、中世ヨーロッパの経済体制と同一だと、推斷するならば、我々は重大な混乱への途をたどることになるであろう。もし我々が16世紀のイングランドの経済体制と15世紀のイングランドの経済体制との基本的同一性を假定するならば、これと同じことが、明かにこれほど極端な程度にはないけれども、あてはまるように思われる。ところが、この兩者を同じ名前と呼ぶことは、或いはそれに異なる名前を興えるのを差控えるだけでも、不可避的にこういう假定を招くことになるのである。

それでは、我々は、封建制の終末と資本主義の開始との間の時期を、どのように特徴づければよいのであろうか？ ドップが「エドワード3世とエリザベスとを距てる200有餘年は、確かに性格上移行的である」と述べ、「封建的生産様式の分解は資本主義的生産様式が發展するまえに、すでに高度の段階に達していたこと、およびこの分解は古い生産様式の胎内における新しい生産様式の發達と何ら緊密な聯繫をもつていなかったこと、は事實であり、そしてこの移行についての多少とも正當な理解にとって著しい重要性を有する」(p. 20) と述べる時、彼は正しい進路の上にいるように思われる。これは全く正しいようであり、私は、もしドップがこの進路をあくまでも追求していたならば、彼はこの問題の満足すべき解決に到達したであろう、と信じている。

通常我々は、一社會體制から他の體制への移行を、二つの體制が直接に向い合つて、覇權がきまるまで戦いぬく過程のように、思っている。このような過程は、勿論

過渡的諸形態の可能性を排除しないけれども、この過渡的諸形態は、支配權を競う二つの體制の諸要素の混合物であると考えられる。例えば、資本主義から社會主義への移行が、何らかのこのような線にそつて進行していることは、明白であり、疑いもなくこの事實のために、ますます我々は、以前の移行もまたこれに類似したものであったに相違ないと想いがちである。

けれども封建制から資本主義への移行にかぎりは、これは重大な誤謬である。前にあげたドップの敘述が強調しているように、西ヨーロッパの封建制は資本主義が生まれるまえに、たとえ現實に死滅してはいなかったにしても、すでに死に頻していた。したがつて、その間に介在する時期は、封建制と資本主義との單純な混合物ではなく、優勢な要素は封建的でもなければまた資本主義的でもなかった、ということになる。

ここは用語法についての立ち入つた論議を行うべき場所ではない。私は、15世紀および16世紀の西ヨーロッパに廣く普及していた體制を、單純に「前資本主義的商品生産」と呼ぶことにする。それは、外ならぬこの商品生産の發達が、第一には封建制の基礎を掘りくづし、それから若干後、つまりこの破壊作業が實質的に完了した後には、資本主義の發達のための基礎を準備した、ということを描するためである<sup>22)</sup>。このようにして、封建制から資本主義への移行は、單一的な中斷されない過程——資本主義から社會主義への移行に類似した過程——ではなくて、全く異つた二つの局面から成つており、こ

22) 商品生産と封建制とは相互に相排除する概念であるから、この時期が非一封建的であるとか、封建以後的であるとかいうことを、特に指定する必要はない。これに反して、資本主義はそれ自體が商品生産の一形態である、したがつて「前資本主義的」という限定がはっきりと行われなければならない。

この體制にたいする最良の名稱は「單純商品生産」だと主張されるかもしれない、これはマルクス主義的理論において十分確立された概念だからである。しかしこの語をかういふように使用することは、不必要な混乱のもとになるように思われる。通常、單純商品生産は、自己の生産手段を所有し相互的交換によって自己の欲望をみたすところの、獨立生産者の體制、と規定されている。かかる理論的架構は多くの理由によって必要である。例えば、これによって我々は交換價值の問題をその最も單純な形態で提出することができるし、また、それは諸階級の本性および生産手段にたいする彼らの關係を明かにするためにも有用である。しかし、前資本主義的商品生産においては、生産手段の中で最も重要なもの——土地——は概して非生産者の階級によって所有されている、そしてこの事實は單純商品生産に関する通常概念からこの體制を鋭く區別するに十分である。

21) *The Modern Quarterly*, II. (Summer, 1947), p. 269.



の二つの局面は、根本的に異った問題を提出し、別個に分析されることが必要である。

封建制から資本主義への移行をこのように特徴づけることは、伝統的なマルクス主義的見解と衝突すると思われるかもしれない。けれども私は衝突しないと思う、それはただこの見解の中に暗に含まれている若干の點をはっきりさせるにすぎないのである。

たとえ（とマルクスは述べた）資本主義的生産の第一の端初はすでに 14 世紀および 15 世紀に地中海沿岸の若干の都市において散發的にみられるとはいえ、資本主義時代というものは 16 世紀から始まる。それが現れるところではどこでも、農奴制の廢止がずっとまえに終っており、また、中世の頂點たる自治都市の存立は大分まえから落ち目になっていた。

更にまた、

商品流通は資本の出發點である。商品生産および發展せる商品流通、商業は、そのもとで資本が発生する歴史的な前提をなす。世界商業および世界市場は、16 世紀において、資本の近代的生活史を開始する。<sup>23)</sup>

まぎれもなくかかる敘述は封建制から資本主義への移行について、私が提出したのと同じの見解を含んでいる、と思う<sup>24)</sup>。

23) Capital. I, p. 787 および 163 [長谷部譯、第 4 分冊 309 頁および第 2 分冊 1 頁] 私はこの個所を新たに譯出した。ムーアおよびアヴェリングの翻譯は不正確であり、原文にある力點が脱落している。[アドラツキー版には前の方の引用文にもイタリックがある——譯者註]

24) 私が特にマルクスからこれらの引用文を選んだのは、勿論、それが簡潔で明瞭だからである。しかし孤立した引用は論點を證明することも反證することもできないことは明白である。封建制から資本主義への移行に關するマルクスの見解についての自分自身の考えをきめようと思う讀者は、少くとも『資本論』の次の部分を注意深く研究しなければならないであろう。すなわち、第 1 卷第 8 編、および第 3 卷第 20 章、第 47 章。

若干の點に關しては、最近刊行された草稿——マルクスが 1857—1858 年の冬に「經濟學批判」の準備のために書いたもの——が、封建制から資本主義への移行の本性に關する彼の考えに光を投ずるために、尙一層貴重である。Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie. (Rohentwurf), Marx-Engels-Lenin Institute (Moscow, 1939)。

特に第一部の 375 頁から始まる「資本主義的生産に先行する諸形態」と題された部分を見よ[飯田貫一譯『資本制生産に先行する諸形態』岩波書店]。しかしこの典據を十分に検討するには、それだけで長い論文が必要になるであろう。だから私はここではただ、私自身のマルクス解釋は、この“Grundrisse”が利用できるようになるまえに、完全に形成されていたのであって、この新し

我々は封建制から資本主義への移行についてのこのような推論の線を、あまりにも極端におしすすめないように注意すべきである。ことに、前資本主義的商品生産を、封建制や資本主義や社會主義に匹敵する独自の社會體制として分類することは、行きすぎであるように思われる。そこには全體としての體制の性質を決定するような、眞に支配的な生産關係は存在しなかった。そこには尙依然として強力な農奴制の名残りや賃労働の活潑な開始とがあったけれども、統計的な意味において最も普遍的であった労働關係の諸形態は、明かに不安定なものであって、生育力ある社會秩序の基礎になることはできなかった。このことは特に、領主と貨幣地代を支拂っている勤勞小作農 (working tenant) (クリストファー・ヒルによれば、これは「16 世紀のイングランドの農村地方の壓倒的大多數」である) との間の關係にあてはまる。マルクスは、「資本主義的地代の起源」と名づけられている章の中で、この關係をきわめて慎重に分析し、それはただ過渡的形態としてのみ正しく理解することができる、と主張した。

まづ散發的に行われ、ついでには多かれ少なかれ國民的規模で行われる現物地代の貨幣地代への轉形は、商業、都市工業、商品生産一般、したがってまた貨幣流通の、かなりの發展を必要とする。……現物地代の轉化した形態としての、そしてまた現物地代の敵對物としての、貨幣地代は、我々がこれまで考察してきた地代型態——生産手段の所有者のもとへ流入する餘剩價值および不拂餘剩労働の正常の形態としての地代——の最終の形態であると同時に、その解體の形態である。……貨幣地代は更に發展すると……土地を獨立農民の所有に轉形するか、または資本主義的生産様式に照應した形態、資本主義的借地農の支拂う地代、にならざるをえない。<sup>25)</sup>

しかも、これは前資本主義的商品生産經濟における不安定な關係の唯一の型ではない。ドップはプロレタリアートの發達に關するきわめて啓發的な章の中で、「小生産者の經濟が、市場、就中、遠方の市場のための生産の分解作用に直面した場合には、もしその強さを増すような何か特別な利益をそれが享受するか、或いはその中のヨリ貧しくヨリ弱い成員に保護を與えるための特別の方策がとられるか、しない限りは、それがいかに不安定なも

い資料によって確證されたのだということを、述べるに止める。

25) Capital, III ch. 47, p. 926 f [長谷部譯第 11 分冊 360—362 頁] ウンターマンの翻譯においては異っている。

のになるか」を示した。(p. 254)

思うに、前資本主義的商品生産は封建的でも資本主義的でもなかったけれども、それは、その本質上、きわめて生育力の乏しい体制であった、と推断しても差支えないであろう。それは封建制の基礎を掘りくづして分解させるにたるほど強力ではあったが、それ自身の積極的かつ独自の構造を發展させるには、あまりにも弱かった。それが積極的な意味において成就することのできたことは、結局、17世紀および18世紀における資本主義の勝利的進行のための基礎を準備することであった。

### VIII 資本主義の勃興についての若干の考察

大體において私は、資本主義の勃興に関するドップの分析には全く同意する。この問題にたいする彼の論述は非常に明瞭で啓発的であるように思われ、私はそれを全巻の白眉と考へたい。しかし、明かにドップ自身が重視している、その中の二つの論點は、私には批判的検討を必要とするように思われる。第一のものは、語の全たき意味における産業資本家の起源に関するものであり、第二のものは本源的蓄積<sup>26)</sup>の過程に関するものである。

ドップは、産業資本が二つの主要な道によって發展するという見解を擁護するために、マルクスの「商人資本」に関する章を引用している。以下はドップの最も重要な章句である。

第一の道——「眞に革命的な道」——によれば、一部の生産者自身が資本を蓄積し商業に手を出し、そして時が経つにつれて、ギルドの手工業的諸制限から自由な資本主義的基礎の上に、生産を組織しはじめた。第二の道によれば、現存する商人階級の一部が「直接に生産を掌握し」はじめ、そうすることによって「歴史的には移行の様式として作用する」けれども、結局においては「眞の資本主義的生産様式にたいする障害となり、後者が發展するにつれて衰退した。」<sup>27)</sup>

ドップはこの二つの方法の内の第一のものに多大の力

點をおいている。128頁では彼は次ぎのように述べている。

諸々の商人資本が、生産を管理すること——慎重に考へだされた「商業を通しての搾取」のための方式とも呼ぶべきものを發展させること——に益々多くの關心を示すようになり、この究極の結果(すなわち、生産を眞に資本主義的な管理に従わせること)にいたる途が準備されたけれども、そして少数の場合には實際にこの結果に到達したかもしれないけれども、一般的にはこの究極の段階は、マルクスが指摘したように、生産者自身の階層から生れた、資本家的要素たる半マニュファクチュアラーや半商人、の勃興に結びつけられていたように思われる。彼らは、たった今自らがそこから身をおこしたばかりの、その階層を、自己に従屬させ組織しはじめたのであった。(p. 128)

また、

17世紀に入ると共に、重力の中心における重大な變化の開始がみられた。すなわち、職人層自身から生れた商人—雇傭主の階級が、諸大組合のヨーマンリーの中で、益々勢力を強めるに至ったこと——マルクスが「眞に革命的な道」と述べた過程——がこれである。(p. 134)

ドップはまた、大陸の若干の地域では早くから資本主義的生産の前途有望な開始がみられたにもかかわらず、だめになつてしまったことを綿々と分析した後に、次ぎのように述べている。

資本主義的發展の比較研究の光にてらしてみると、この段階においては生産者自身の階層からの産業資本家階級の勃興が生産の多少とも革命的な轉形がおこるための条件だという、マルクスの主張は中心的な重要性を獲得しはじめる。(p. 161)

しかし、ドップが「この過程の詳細は決して明かではなく、直接にそれに關係のある證據は殆んどない」ことを容認していることは注目し得る。(p. 134) 實際、間接的な性格の證據でさえ殆んど手に入らないように思われるから、一論者が次ぎのように言わずにいられなかったのも無理はない。「生産の眞に革命的な轉形、および商人資本の生産にたいする管理の破壊は、かつての職人の階層から出てきた人々によって成就された、というマルクスに由來する見解のためには、もっと多くの證據をさがしだすことが望ましかつたであろう」と<sup>28)</sup>。

しかし私は、この場合の眞の難點は、證據の缺如とい

26) ドップはムーア・アヴェリングの翻譯にしたがって、「原始的」(“primitive”)蓄積といつている。しかしこれは誤解に導くようである。というのは、その趣旨はこの過程が語の通常の意味において原始的だということではなくて(尤も、そうであるかもしれないし、また通常はそうであるが)、それ以前の蓄積行爲によつて先行されていない、ということだからである。故に「本源的」(“original”)かまたは「第一次的」(“primary”)が、この場合における *ursprunglich* のヨリよい譯語である。

27) ドップの123頁、中の引用は *Capital*, III, p. 393 f [長谷部譯第9分冊 376頁] からのものである。

28) *Perez Zagorin in Science & Society*, XII (Spring, 1948), p. 280 f.



うよりも（私は、必要とされている種類の證據が實在するかどうか、疑問だと思っているが）、むしろマルクスの誤讀だと思う。マルクスが「眞に革命的な道」について述べている個所全體を、轉載することにしよう。

封建的生産様式からの移行は二つの途をとる。生産者が商人となり、資本家となって、農業的自然經濟および中世都市工業のギルドに圍繞された手工業に對立する。これは眞に革命的な道である。あるいは商人が直接に生産を掌握する。この道が歴史的には移行の様式として作用するとはいへ——例えば、17世紀のイングランドの反物商が、自立したままの織物業者達を自己の管理の下において、彼らに羊毛を賣りまた彼らから織物を買取る、というように——それにもかかわらず、この道はそれ自體としては、古い生産様式の廢棄をもたらすことは殆んどなく、むしろ古い生産様式を保存し、自己の前提として維持するのである。<sup>29)</sup>

一見してわかるように、マルクスは、職人的生産者の階層から勃興する資本家については、何ごとをも述べてはいない。勿論、マルクスによって用いられた表現——「生産者が商人となり、資本家となる」——がそういう意味を含みうるということは、たしかに事實である。だがそれはまた、生産者が、彼の背景が何であろうととにかく、商人ならびに賃労働の雇傭者として、乗り出すということをも等しく意味しうる。全體の文脈からみて、後者が一層理に合った解釋であるように思われる。マルクスは、十分に發育した資本主義的企業の發足と問屋制度の緩慢な發展とを、對照していたのであると、私は信じている。生産者が布衣から身をおこすことに、彼が關心をもっていた形跡は何もない。その上、彼が『資本論』第一巻の中で、この問題をはっきりと取扱っている時に、彼が述べていることは、上に引用した章句にたいするドップの解釋と全然調和することができない。

産業資本家の創生記は、借地農のそれのように、漸次的な仕方では進まなかった。疑いもなく、多數の小さなギルド親方や、さらにより多數の自立的小手工業者とか、または賃労働者さえもが、自己を小資本家に轉形し、それから（賃労働の搾取の漸次的擴大およびそれに照應する蓄積によって）文句なしの資本家に轉形した。……かかる方法の蝸牛的あゆみは、15世紀末の諸大發見によって創造された新しい世界市場の商業的諸要求に照應するものでは決してなかった<sup>30)</sup>。

これは、「産業資本家の創生記」と題されている章の劈頭

の言葉であり、この章の殘餘の大部分は、この「蝸牛的あゆみ」よりもはるかに急速に大量の資本を集積するための方法であったところの、商業および掠奪の記述に捧げられている。そして、マルクスはこういう蓄積が實際にどういう方法によって工業の中へ入ったかについては殆んど述べていないけれども、彼が、布衣から身をおこした生産者にたいして、この過程における重大な役割をふりあてていた、とは殆んど信じられない。

もし我々がマルクスの言おうとしたことを次ぎのように解釋するなら、つまり「眞に革命的な道」とは問屋制度という中間的段階を通過することなしに完全に發育した資本主義的企業を發足させるために使用できる資本をもった人々にたいするものであった、という意味に解するなら、私は彼の主張の擁護のために豊富な證據を見出すことは、殆んど困難ではないであろう、と考える。ネフ Nef は、彼がイングランドにおける第一次産業革命と呼ぶもの（ほぼ 1540 年から 1640 年まで）が、まさに、鑛山業、冶金業、醸造業、精糖業、石鹼、明礬、ガラス、および製鹽、というような「新」産業への、この種の投資を著しい特徴としていたことを（勿論、マルクスについては全然言及していないが）、争う餘地のないほどに明かにした<sup>31)</sup>。そして、それが「眞に革命的な道」であったということは、イングランドにおける第一次産業革命の成果によって立證された。すなわち、いっさいの競争相手國民にたいする經濟的霸權と最初のブルジョア政治革命がこれである。

さて、資本主義の勃興に関するドップの論題の第二のものにとりかかることにしよう。それは批判的検討を必要とするように思われる。今度は私はもつと簡単にすませることができる。

ドップは本源的蓄積の過程が二つの全く異った局面を含む、と見なしている (p. 177 ff.)。第一には勃興しつつあるブルジョアジーが、見切價格で（または最も好都合な場合には、例えばヘンリー 8 世時代の教會用地のように、無償で）、ある種の資産や富にたいする請求權を獲得する。この局面においては、單に富がブルジョアジーに移轉されるだけでなく、またそれは比較的少數の者の手に集中される。第二に、そして後には、實現の局面が到來する。ドップは次のように述べている。

第二のそして仕上げの局面は、蓄積の過程の第一の局面に劣らぬ重要性をもっている。すなわち、この局面によつて本源的蓄積の諸對象が、工業生産への現實

29) Capital, III, p. 393 [長谷部譯第 9 分冊 376 頁]

30) 同上, I, p. 822 [同上, 第 4 分冊 376—7 頁]

31) J. V. Nef, Industry and Government in France and England, 1540—1640 (Philadelphia, 1940), 特に、第 1 章および第 3 章。

の投資を可能ならしめるために、(少くとも部分的には) 實現され、賣却される——それは、その賣上金によって、綿業機械、工場建物、鑄鐵場、原料、および勞働力を獲得する(かまたは創りだす)ために行われる、最初の蓄積對象の賣却である。(p. 183)

私に見えるかぎりでは、ドップはこの實現局面が實在することについては全然何の證據も提供していない。そしてまたこれは何ら驚くべきことではない。というのは、こういう局面が實在したはずであるとか、あるいは實際に實在したとかいうことを、想定する理由は全然ないということも、等しく明瞭なことのようと思われるからである。ドップがみずから申し分なく明かにしているように、獲得局面の間に獲得されて比較的少數の人の手に集中された資産は、土地や債務—請求權や貴金屬を、換言すれば凍結された資産も流動的な資産も共に含んだ、多種多様なものであった。また彼は、これはあたかも、ブルジョアジーがその凍結資産(ことに公債)を流動資産に轉化するために、銀行や信用機關を發展させた時期であったということをも認めている。こういう事情の下において、何故にブルジョアジーが、工業投資のための資本を實現するために、賣却を餘儀なくされたのかは不可解である。更にまた、一體どんな階級が、ブルジョアジーから資産を買いとって、彼らに流動資金を供給するこ

とができたのか、不可解である。勿論これは、ブルジョアジーの個々の成員が、工業投資のための資金を獲得するために、同じ階級の他の成員、または他の階級の成員にたいして、賣却することができなかつたとか賣却しなかつたとか、言うのではない。しかし資本主義的發展のこの時代には、全體としてのブルジョアジーが、資産を賣却することのできるような、他階級は存在しなかつたということは確かである。

實際のところ、ドップは、實現局面の必要性和重要性とを主張している以外には、それについて殆んど何も言っていないのである。工業投資のために必要な前提條件を分析する段になると、彼は、ブルジョアジーの側における獲得にたいして必要とされる補完物は、ブルジョアジーによる實現ではなくて、古い生産組織の破壊であり、就中、進んで勞賃のために働く一階級を形成するにたるほど多數の勤勞農民が收奪されることであつた、ということ明かにしている。これはたしかに正しいことである。したがって私は、實現局面の重要性についてのドップの度重なる敘述が、一部の讀者の注意を、本源的蓄積期の本質的問題に關するドップの卓越した論述からそらせるのに役立つかもしれないことを、ただ遺憾に思うのみである。

## ポール・M・スウィージー氏への反批判

### モーリス・ドップ

封建制から資本主義への移行についてのポール・スウィージーの論文は、明瞭でしかも刺戟的な仕方で、多數の重要な論點を提起しており、これらの點についての論議は、歴史的發展の理解ならびにこの發展の研究の方法としてのマルクス主義の理解を、専ら利することになるであろう。はじめに、私は個人としては、思考と研究を押し進めるための著しい挑戦ともいふべきこの議論への、彼の寄與を歓迎している、と述べてもよいだろうか？ 彼が述べていることの大部分については、私は少しも意見の不一致を感じない。數ヶ所で彼は、私の述べたことにたいして異議を唱えているけれども、我々間の差異は力點および定式化の違ひである。しかし、一、二の個所においては、方法および分析に關する一層基本的な差異が現われているようであり、この場合には彼の解釋は誤りに導くもののように思われる。

### I

第一に私は、スウィージーが私の封建制の規定を拒否しているのか、それともただ不完全だと考えているだけなのか、必ずしもよくわからない。彼が言っているように、この規定は封建制と農奴制との全くの同一視——假りに後者によって、單に義務的勞役の遂行のみでなく、直接的な政治的一法律制による生産者の搾取、をも意味するものとして<sup>1)</sup>——を基礎にしている。もし彼が、

1) 勞働にたいする直接的な政治的一法律制の諸要素は現代をも含めての歴史上の廣くかけはなれた諸時期に見出すことができるから、この語をこのように擴げることには不満足だということを、スウィージーは示唆している。もしこの要素が優位をしめているなら、この規定に基いて、經濟形態は、問題の封建的な經濟形態と



このように規定された封建制は、ヨーロッパ經濟の中世的形態よりも一層廣汎なものを含んでおり、(封建制の多少とも一層十全な研究においては) 周到な分析をうけるに値する種々様々な型態を包含している、ということをおうとして言おうとしているのならば、私は直ちに同意する。しかし「生産の組織」(“system of production” に言及しているところをみると、彼は何かこれとは別のことを言っているようであり、そして生産の組織をマルクスの用語法における生産の様式と對照しているように思われる。生産の組織が正確には何をさすのか、私にはよくわからない。しかし、後の方で述べられていることからみて、この語に生産者と彼の市場との間の諸關係を含ませるつもりだ、ということがわかる。そこでは、これらの(生産諸關係と對照された) 交換諸關係がスウィーダーの歴史的過程の解釋における注意の焦點だということさえ、暗示されている。(例えば、彼は「封建制の決定的な特徴」を「それが使用のための生産の組織であること」にある、とみなしている。)

もしそうだとすれば我々は基本的な論争點をもつことになると思う。私の『諸研究』の中で使用した規定は、わざと封建制に特有な生産諸關係、すなわち直接的生産者と彼の君主との關係、によっていた。この強制的關係は、生産者の餘剩労働の支配階級による直接的抽出にあり、それは勿論生産諸力のある一定の發展水準によって條件づけられていた。生産方法は相對的に幼稚であり、(少くとも生産者自身の生活資料に關するかぎりでは) マルクスが「小生産様式」と名づけた型のものであった。すなわちそこでは、生産者は個別的生産單位として、自己の生産手続を所有しているのである。私はこれが決定的特徴だと考えており、異った諸經濟形態がこの特徴を共有する場合には、それらが共にするこの共通の要素は、それらが相違する他の諸點(例えば、市場にたいする生産の關係)よりも、一層大きな意義をもつと考へている。明かに、この生産關係自身は、餘剩生産物の強制的抽出がとる形態によって、例えば直接的勞役であるかそれとも現物または貨幣による貢租の領得であるかによって、かなり多様なものでありうる<sup>2)</sup>。しかしこの形態による

なるであろう。しかし、もしこの要素が單に附隨的、從屬的なものにすぎないならば、このようにいうことができないことは、あたかも雇傭労働の附隨的存在がその社會を資本主義的とするに足りないのと同様である。スウィーダーの考へている「適合しない」場合の多くは、強制労働が純附隨的であって、典型的ではない場合である。

2) 『資本論』第三卷の「労働地代、現物地代、および貨幣地代」に關するマルクスの分析をみよ。私が特に注意をうながしたいのは、マルクスがこの問題について

區別は「西ヨーロッパ封建制」——スウィーダーは私がこれを特に區別してそれに専念すべきであった、と考へている——と東ヨーロッパにおける封建制との間の區別には照應しない(尤も、アジア的封建制においては貢租的關係が支配的であって、これにその特殊な刻印を與えていたように思われるけれども)。西ヨーロッパと東ヨーロッパとは、疑いもなくその諸條件に重大な差異があつたけれども、また「不拂餘剩労働が直接的生産者から汲みだされる形態」に關しては、著しい類似があつた。「西ヨーロッパ封建制」はある特殊な類であると主張し、それにのみ「封建的」という稱號を與えたいという願望は、ブルジョア的歴史家の一產物であり、法律的な特徴と特殊性に集中する彼らの傾向の一產物である、と私は信じている。

## II

それを動かすために何らかの外的な力を必要とした「西ヨーロッパ封建制の保守的な、そして變化に抵抗する性格」に關しては、私は、それを看過したといつて非難されているけれども、尙依然としてかなり懷疑的である。勿論、たしかに資本主義經濟と對照すれば、封建社會はきわめて安定的であり不活潑であつた。しかしこれは封建制が自らの中に變化への傾向をもたなかつたということではない。もしそのようにいうならば、必ずやそれは封建制を、經濟社會はそれ自身の内部的矛盾によって動かされるというマルクスの一般的發展法則にたいす一例外とすることになるであろう。事實、封建時代には技術におけるかなりの變化がみられ<sup>3)</sup>、封建制の後期の數世紀は初期封建制の數世紀にたいして著しい差異を示していた。しかも、我々は、西ヨーロッパではなくて東洋ことに貢租的農奴制のアジヤ的形態にこそ、最も安

の記述の中で次のように述べている個所である。「不拂餘剩労働が直接的生産者から汲みだされる獨立的・經濟的形態は、支配者と被支配者との關係を規定するのであるが、この關係は直接に生産そのものから發生し、しかも生産にたいして規定的要素として反作用する。……生産諸條件の所有者と直接的生産者との直接的關係こそは、常に、全社會構造のいちばん奥の祕密、かくされた基礎、を明かにするものである。……支配者と被支配者との間のこの關係の形態は當然常に、労働の方法および労働の社會的生產力の一定の發展段階に照應する。このことは、同じ經濟的基礎が、たとえその主要條件は同じであつても、現象の上では無限の變化および差等を示すことを、妨げない。」Capital. III, p. 919 [長谷部譯第11分冊, 348—9頁]

3) Molly Gibbs, Feudal Order (London, 1949), p. 5—7, 92f.

定的な形態を求めなければならないようである。そして、注目すべきことは、それが現物租税を通して餘剰労働が領得される形態をもっていたことであり、——特にこの形態については——マルクスが、「我々がアジャでみるような停滞的社會状態の基礎となるのに全く適している」と述べたことである<sup>4)</sup>。

スウィーザーは、封建制が必ずしも靜態的ではないと述べることによって、彼の敘述を緩和している。彼が主張していることは結局、發生するような運動は「それを變形する傾向を全然有しない」ということにつける。しかし、この限定にもかかわらず、封建制の下では階級闘争が全然革命的な役割を演じえないという含意は、依然として残っている。私は、革命のおよび變形的傾向のこういう否定の根柢には、ある混亂があるのではないかと思う。領主にたいする農民の階級闘争が、何らかの單純でしかも直接的な仕方で、資本主義を勃興させる、とは誰もいっていない。この階級闘争の作用は、封建的君主制にたいする小生産様式の依存を緩和し、結局において封建的搾取からの小生産者の解放を揺りおこす、ことである。したがって、小生産様式からこそ（それが獲得する行動の獨立性の程度に應じて、そしてまたこの程度の範圍内で社會的分化は發展する）資本主義が生れるのである。これは基本的な點であり、後にまた立歸って論じることにする。

### III

スウィーザーは、内部的に安定的な封建制はただ外的な力——商業と市場——の衝擊によってのみ分解することができた、という彼自身の命題<sup>5)</sup>を擁護する過程の中で、封建制の衰退は専ら内的諸力の仕業であって商業の發達はこの過程とは何の関係をももたなかった、というのが私の見解だと述べている。彼は、それを内的闘争かそれとも外的諸力かどちらかという問題だと思っているようである。こういう提出の仕方はあまりにも單純化されていて、殆んど機械的でさえあるように思われる。私はこれを二者の相互作用と見ている。尤も私が内部的矛盾に第一次的重点をおいていることは事實である。というのは、私の信ずるところでは、この内的矛盾はどのような場合にも（たとえきわめて異った時代においてであろうとも）作用するからであり、またそれは外的影響が

及す作用の特定の形態および方向を決定するからである。私は、市場都市および商業の發達が古い生産様式の分解を加速化するために重大な役割を演じたことを、決して否定してはいない。私の主張は、商業が古い生産様式内の内的闘争を強めるという程度の影響を及した、ということである。例えば商業の發達は（私が『諸研究』の中の數ヶ所で指摘したように、例えば p. 60—62, および p. 253f）小生産様式の内部における社會的分化の過程を進めて、一方の側に富農 Kulak 階級を、他方の側に半プロレタリアートを、創りだした。またスウィーザーが力説しているように、都市は逃亡農奴にたいする磁石として作用した。この農奴の逃亡が、こういう都市の磁石の吸引力に（また、ヨーロッパのある地方では、その代りとして、自由な土地の誘惑に）ヨリ多く基因していたか、それとも封建的搾取の反撥力にヨリ多く基因していたか、を論ずることには、私はさほど多くの關心をもっていない。それは、時と場所を異にすれば種々程度を異にするとはいえ、明かに兩方に關することであつた。しかし、この逃亡が及す特殊な結果は、農奴と封建的搾取者との間の關係の特殊性に基因していたのである<sup>6)</sup>。

したがって私が「封建的支配階級の收入にたいする必要の増大と農奴の土地からの逃亡が共に封建的體制の内部に作用する諸力によって説明されうること」や「都市の勃興が封建體制にとって内的な過程であつたことを明かにする」義務がある、とは思わない。（尤も私は、ある程度までは後者は眞實であり、封建制は決して純粹な「自然經濟」ではなかったという理由によって、それは都市を奨励して遠隔地商業の必要をみたしたと信じているけれども。）同時にまた、私は、封建制の分解と「商業の中心地への近さ」との間には必ず相關々係がある、というスウィーザーの主張は間違っていると思う。『諸研究』の中で私は、若干の例をあげて「貨幣經濟」に關する俗流理論家によつて普及されてきた單純化された見解を、反駁しておいた。ここではその中の二つだけを反復することにしよう。直接的勞役の形態をとった農奴制が最も早く消滅したのは、明かにイングランドの北方および西方の奥地であつて、勞役が最も頑強に存続したのは、都市

6) 序でに一言すると、スウィーザーは、重要なことは都市への逃亡の大きさではなくて、逃亡の脅威（それは恐らくはせいぜい小規模な移動があつてそれに伴つて發生したのである）のために貴族が諸讓歩を行つて憂慮すべきほどに封建制を弱體化することを餘儀なくされた點にあるということを力説しているが、私はこの重大な考慮に全面的に同意する。

4) Capital, III, p. 924 [長谷部譯 11 分冊 358 頁]

5) 彼が「事實上その體制にとって外的な諸原因から生ずるものとしてのみ説明することのできる歴史的發展」について述べている以上、彼の見解の中にこういう考えがあることは疑いない。



市場と商業通路をもった一層發展した、南東部であった。同じく、東ヨーロッパの多くの地方における 15 世紀および 16 世紀の農奴制の強化は、商業の發達と結びついており、相關々係は（スウィーギーが主張しているように）都市への近接と封建的分解との間にあったのではなくて、市場への近接と農奴制の強化との間にあったのである【『諸研究』 38—42 頁を参照）。スウィーギーはこれらの事實に言及している。だがそれにもかかわらず、彼は、封建的關係が解體に抗したのはただ「交換經濟の周邊において」のみであった、と主張しているのである。

スウィーギーの注意の焦點となっている「生産の組織」が、生産關係よりもむしろ交換の領域にヨリ多くの關係をもっているということは、彼の敘述の中のかかなり驚くべき一脱漏によって明かである。彼は、常に決定的に重要なこととみなされている次ぎの事實にたいして、どこにおいても附隨的な配慮しか行っていない。すなわち領主による餘剩勞働の強制的抽出から自由な雇傭勞働の使用への移行は、安價な雇傭勞働（すなわちプロレタリア的または半プロレタリア的要素）の存在如何にかかっていたに相違ないということ、がこれである。これは、古い社會關係が生きのびたかそれとも解體したかを決定する上において、市場の近さよりも一層基本的な要因であった、と私は信じている。勿論、この要因と商業の發達、特に（すでに述べたように）商業が小生産様式内の社會的分化の過程に及す作用、との間には、相互作用があった。しかし、疑いもなくこの要因は、種々異った場所および時代に商業が及した作用を決定するに當って、決定的な役割を演じたに相違ない？ スウィーギーがこの要因を軽くかたづけているのは、恐らく彼がそれはあまりにも明白なことで強調する必要がないと考えているためであろう。あるいはもしかすると、彼が貨幣地代による農地の貸與を農奴制の直接的後繼者と考えているためかもしれない。この後者の點を考慮すると、我々は「ヨーロッパにおいて封建制の後に來たものは何か？」という彼の問題に立ちいたる。

#### IV

14 世紀と 16 世紀との間の西ヨーロッパの經濟社會を、古い經濟形態は急速な分解の過程にあり新しいものは同時に出現しつつあった、という意味において、複合的であり移行的であったと考える點においては、私は全くスウィーギーと一致している。私はまた、この期間中には、小生産様式は封建的搾取から自己を解放する過程にあったけれどもまだ資本主義的生産關係には（少くとも著しい程度には）従っていなかった、と考える點においても

彼と一致している。更に私は、いやしくも封建制から資本主義への推移を正しく理解するためにはこの事實を承認することが肝要だと考えている。しかしスウィーギーはこれよりも更に進んでいる。彼がそれは移行的であるという場合には、それが尙依然として封建的であること（たとえ封建經濟は高度の解體段階にあったとはいへ）の可能性を排除するような意味でそういうのである。もし人がそれは封建的でも資本主義的でもないそれ独自の別個の生産様式であると言いたいのなら、こういうやり方には重要な意味があるように思われる。これは私の考えるところでは不可能な處置であり、そしてスウィーギーもこういうゆきすぎを欲しない點では同意見である。したがって究極において、この 2 世紀は明かに天と地の間の天空に居心地悪く吊下げられたままになっているのである。歴史的發展の過程においては、それは家なき混血兒として分類されなければならない。このような回答は、繼起的な諸體制または諸段階を通過する歴史的發展についての、純進化論的な見解にとっては十分妥當なものかもしれないが、歴史的發展についての革命的見解——歴史を、歴史的轉形の決定的機構としての社會革命（一階級から他階級への權力の移轉という意味での）を件う、階級的諸體制の繼起とみる見解——にとっては妥當なものではないであろうということを、私は示唆しておく。

明かにスウィーギーは、この時期の支配階級は何であったか？ という決定的な問題を提起することを怠った（或いは假りに提起したとしても、それにたいする回答を握りつぶした）のである。（スウィーギーが自ら認めているように）當時はまだ發展した資本主義的生産は存在しなかったのであるから、それが資本家階級であったということはあるにない。もし、それはまだ資本をブルジョア的生産様式の發展に投下していないブルジョア階級というような形をとった、何か封建的と資本主義的との間の中間的なもの、であったと答えるならば、その場合には人は「商人資本主義」に関するポクロフスキーの泥沼の中にいるのである。もし商人ブルジョア階級が支配階級を形成していたのなら、國家はある種のブルジョア國家であったはずである。そしてもし、16 世紀ではなくて 15 世紀の初めにさえ、すでに國家がブルジョア國家であったとすれば、17 世紀の内亂の本質的争點は一體何であったのか？ それがブルジョア革命であったということは（この見解にしたがえば）ありえない。我々は、この問題に関する數年前の豫備的討議において誰かが述べたのと同じような想定、すなわち、それはすでに存在していたブルジョア國家權力にたいして國王と宮廷によって企圖され上演された反革命にたいする闘争であっ

た、という想定に従う外はない<sup>7)</sup>。更に我々は、ブルジョア革命と記すにたるような、多少とも決定的な歴史的時機が存在したことを否定するか、さもなければこのブルジョア革命をテュードル時代のはじめかまたはそれ以前の世紀に求めるか、という二者選一の前に立たされる。

これはここ数年間に英國のマルクス主義的歴史家の間で大いに論議された問題である。この時期の絶対主義國家の本性に関する一層大きな問題もまた、戦争直前のソヴェト歴史家の間の問題であった。もし我々が上記の二者選一を拒否するならば、支配階級は尙依然として封建的であって國家は尙依然としてその支配の政治的用具であったという見解（私はこれが正しいものだと信じている）に従うほかはない。そして、もしそうだとすれば、この支配階級は所得に関しては、小生産様式の搾取という、残存せる封建的方法に依存していたに相違ない。たしかに商業は經濟の中で指導的な地位をしめるようになっていたから、この支配階級自身が（封建制の全盛期における多くの中世的修道院もまたそうであったように）商業に関心をもち、商人ブルジョアジー（特に輸出貿易商）の若干部分を自己との經濟的協力関係および政治的同盟にひきいれていたことは事實である（「新テュードル貴族」の多くはここから発生した）。したがって中央集權的國家權力の時代における封建的搾取のかかる後期的解體的形態は、初期の數世紀の封建的搾取とは多くの點において異っており、明かに封建的「外皮」は多くの個所において糸がみえるほどすりきれていた。たしかにまた、小生産様式の封建的搾取はただきわめてまれにのみ直接的勞役という古典的形態をとったにすぎず、主としては貨幣地代の形態をとっていた。しかしながら、政治的強制とマナーの習慣の壓迫は、尙依然として經濟關係を支配しており（イングランドの農村地方の廣大な地域においてひきつづきそうであったように）、土地の自由市場が（自由な勞働の可動性と同じく）存在しなかった以上は、この搾取の形態がその封建的形態を——たとえ退化したそして急速に分解しつつある形態であったとはいえ——ぬぎすてていたということとはできない。

この點に関して私が注意を促したいことは、スウィーザーがマルクスから（『資本論』第3巻47章）引用している貨幣地代に関する章句の中で、マルクスが述べている貨幣地代は、まだ、借地農が獨立的小作農（independent tenant）として契約的地代を支拂うという資本主義的地代ではなくて、（明かに含意されていたように）たとえ解

體的形態ではあるにせよ、尙依然として封建的地代の形態であるということである。（「現物地代の轉化した形態としての、そしてまた現物地代の敵對物としての、貨幣地代は、我々がこれまで考察してきた地代型態……の最終の形態であると同時に、その解體的形態である。」）同じ節の前の方でマルクスは次ぎのように述べている。「この地代の基礎は、その出發點たる現物地代の場合と同一不變である。直接的生産者は尙依然として土地の占有者であり……彼は地主のために……強制された餘剩勞働を行わなければならない——そしてこの強制された餘剩勞働は、今は、餘剩生産物の販賣によって獲得された貨幣で支拂われる。」（p. 926—長谷部譯第11分冊360頁）

## V

スウィーザーの批判の最後の二點については私は簡単にすませるようにしよう。資本主義の黎明期に小生産様式から生まれた資本家が演じた著しい役割については、この問題に関するマルクスの議論からの例の決定的な引用文の解釋がどうであるかにかゝりなく、豊富な證據がある<sup>8)</sup>、（しかもなお私は、それがこの章句の通常の解釋を意味すると思う）ということを示唆しておく。私はこの證據の一部を『諸研究』の中であげておいた（第4章）。これは疑いもなく、これまでに行われたよりももっと多くの研究に値する問題である。しかしこの時期の勃興しつつある中・小ブルジョアジーの重要性は、例えばすでにトニー Tawney が明かにしたところである。農村における富農（Kulak）經營の意義は、どんなに高く評價しても過大にすぎることはないという證據は益々多くなってきている。彼がきわめて古い時代に、自分より貧しい小屋住農（cotter）の勞働を雇傭し、16世紀にはかなり廣汎な規模で新しい改善された圃田農法の開拓者になつていた、形跡がある。最近この時期の歴史家は、テュードル時代におけるイングランドの發展の著しい特徴は、こういうクラーク・ヨーマン・農民（kulak yeoman farmers）が小ジェントリーになり上って、マナーを買い入れ、地方的郷土層（local squirearchy）の列に入ることの容易な點にあったということ、指摘した。彼らが（コスミンスキーが示唆したように）1381年の農民一揆の時にさえ、指導的な役割を演じたというのは

8) 「直接にそれに関係した證據は殆んどない」という私の章句をスウィーザーは引用しているが、これは「この過程の詳細」について言ったのであって、この型の資本家の存在やその演じた役割について、言ったのではない。

7) クリストファー・ヒルの論文「1644年のイギリス革命」について、「レーバー・マンズリー」(1941)誌上において行われた討論の中の、P. F。



多分眞實であろう。疑いもなく、彼らは(労働の雇傭主として)テュードル・インフレーションによる實質勞賃の下落のために、大いに榮えたのであった。そして比較的小さなジェントリーおよび勃興しつつある富農(kulak)は、廣汎な規模にわたる地方織物業の組織者であった。明かに彼らは17世紀のブルジョア革命におけるきわめて重要な推進力であり、殊にクロムウェルの新型軍隊(New Model Army)の支柱となった。更に私は、彼らがこういう存在であったという事實は、ブルジョア革命の階級的整列を理解するための鍵である、と信じている。それは就中、商人資本が常に進歩的な役割を演じたどころではなくて、屢々封建的反動と同盟していることが見出された、という理由によつてである。

同様に、都市の職人ギルドの中にはこれによく似た型の企業家が澤山いて、商業に手を出し、自分より貧しい職人を問屋制度によって雇傭していた。私は、16世紀末と17世紀はじめにみられる諸ギルド間の移動、就中、新スチュアート組合(new Stuart corporations)の勃興は、これらの發展によつて説明されるべきものであることを示唆しておいた(そしてこの示唆は、もし私の記憶が正しければ、本來はアンウィンからきたものである)。我々が見うるかぎりにおいては、彼ら(疑いもなく地方の織物業者)こそは、イギリス革命の強固な支持者であったのであり、ネフが、その多くは王黨派であった、と述べているような、富める特許權所有者ではなかった。というのは彼らは尙特權に依存しており、その特權を宮廷の勢力によつて得ていたからである。この發展路線が資本主義の最初の段階、産業革命以前の段階を生み出す上にもつ重要性を、どうして否定することができるのか、私には理解できない<sup>9)</sup>。産業革命の時代においてさえ、新しい企業家の多くは問屋制度の「商人—マニファクチュアラー」として出發した小企業家であった。なるほど、大資本を必要とする若干の産業(例えば、鐵、銅、

9) スウィージーは、マルクスが「蝸牛的あゆみ」で進行するような發展を膨脹の完全な可能性に比較して述べた個所を、引用している。しかし、マルクスがここで述べている「資本主義的生産の幼少」期には、資本主義の發展は(後代の發展に比較すれば)まさにこの「蝸牛的あゆみ」で進んだのであった。だからこそ、新しいブルジョアジーが政治權力を獲得し、(マルクスがこの章の後の方で述べているように)「國家權力を……封建的生産様式の資本主義の様式への轉形の過程を温室的に助長し、移行を短縮するために使用し」はじめるようになってはじめて、この轉形は完成されることができたのである。その時には、だがその時にのみ、初期の發展の蝸牛的あゆみが加速化されることができたのであり、産業革命の急速な發達のための土臺がおかれたのであった。

および眞鍮)においては、己に相異があった。しかし、布衣から身をおこした小資本家が新しい生産様式の開拓者になりえたか否かを決定したのは技術的條件であり、技術的變化が産業革命と結びつけられるまでは(尤もその一部は1800年より2世紀もまえにすでに發生していたということは事實である)、小資本家は依然として指導的役割を演ずることができた。

## VI

蓄積過程における、いわゆる「實現の局面」に関しては、スウィージーが私の分析の弱點を指摘したことを、認めなければならない。この點については私自身疑問もっていたし、その點に關する證據の不十分なことにも気づいていた。こういう局面が實在するかどうかは、私の主な論點とは無關係である。というのは、蓄積過程の本質は他人の收奪であつて、單に資本家による特殊な範疇の富の獲得なのではない、というのが主な論點であつたからである。しかしこれはブルジョア—致富という側面が存在することを否定するわけではない。そしてこの場合には、「二つの局面」を區別することに若干の重要性があると私は信じている。それはマルクス主義的研究を適用すれば有益な結果がえられるかもしれない論題であるということ、を私は示唆しておく。また私は「第二局面」が何らかの現實的なものに照應する假説だと考えることを止めない。

それはブルジョアジーが前以て蓄積されている資産がある新しい階級にたいして實現するという場合ではない、この點については我々の意見は一致している。實際、ブルジョアジーが階級としてそのように行う必要は全くないのである。何故なら、一たびプロレタリアートが造出されれば、資本主義的生産を擴張するに際して全體としてのブルジョアジーに要する唯一の「費用」は、労働者に(勞賃として)前拂いしなければならない生活資料だからである——これは古典派經濟學者がよく知っていたことである。土地や田舎の家屋等々の所有は、それ自體では、彼らがこの生活資料を支給するための助けにならない。たとえ彼がその財産を第三者に賣却することができたとしても、これは——外國貿易を別にすれば——必ずしも全體としての資本家社會にとつての生活資料ファンドを増加させることにはならなかつたであろう。しかし全體としての階級についてあてはまることでも、その一部、つまり(スウィージーが暗に述べているように)十分な流動資金の缺如のために労働資本として作用することを妨げられている一部の資本家については、あてはまらないかもしれない。そして(労働力を買いたいとい

う欲求、つまり生産に投資したいという欲求に感染した)ブルジョアジーのある層が、不動産や証券を、尙依然としてこういう形で富を獲得することを好んでいる他の層のブルジョアジーにたいして、賣却すると述べることには、實質的な意味があるかもしれない。産業革命を賄うために必要な投資がすべてその当時の新しい産業指導者の經常所得から生まれてきたということは、勿論ありうることである、すなわち、ダービー、デール、ウィルキンソン、ウェッチウッドおよびロードクリップ。この場合には何も言うべきことはない。先きに述べたような形態の、まえ以つてのブルジョア致富は、産業の發達を賄うための要因としては無現してよい。しかし、これは多分ありそうもないことのように思われる。イングランドにおける初期の運河や鐵道のような建設計畫が賄われたのと同じ源泉によって、多くの仕事が行われたということ、私は知らない。新しい企業家の多くは、資本の缺乏のために不利な地位にあったこと、そして19世紀はじめに發達しつつあった綿工業のための資本の多くは、織物商人からきたこと、を我々は知っている。信用組織は、發展しつつある産業の必要をみたすにたるほどには、まだ發展していなかった。このことは、19世紀初頭における不安定な「地方銀行」の茸生がまさにこの間隙をみた

すためであったということによって知ることができる。18世紀には、隱退した東印度歸りの「大金持」(“nabobs”)のような人々にたいする、債券や不動産の賣却が大量に行われたこと、これらのものの賣却者達はその賣上金をすぐにまたは後に、當時の膨脹しつつある産業および商業に投資するために使用したこと、そしてこういうような通路によって——二段階をもつた過程によって——植民地の掠奪物からえられた富が産業革命を肥やしたということ、これは研究する價値のある假設であるように思われる。

たとえ著しい額の財産の移轉が全く行なわれなかったとしても、私の「第二局面」は必ずしも全然證明を缺くことにはならないと思う。それは全體としてのブルジョアジーが不動産や高價な物や債券にたいする初期の好みから、生産手段や勞働力への投資にたいする好みへ移った時期を表示するものとしての意義(尤も明かに幾分異つたものではあるが)をもつことができよう。たとえ、前者のかなりの量の賣却が現實には全然おこらなかつたとしても、この移行はこのような資産の價格や經濟的社會的諸活動にたいして大きな影響を及した。

(岡 稔 譯)